

ちばなの匂ひもさすがに遠からざれば、人々の契も昔にかはらず、猶此あたりえ立さらで、舊き庵もや、近う、三間の茅屋つぎくしう、杉の柱いと清げに削なし、竹の枝折戸安らかに、葭垣厚く、まわたり、南に向ひ池にのぞみて、水樓となす、地は富士に對して、柴門景を進てな、めなり、浙江の潮三ツまたの淀にた、へて、月を見る、便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ、名月のよそほひにとて、先ばせを移す、其葉廣うして、琴をおほふにたれり、或は半吹をれて、鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ、たま、花咲どもは、なやかならず、莖太けれども、斧にあたらす、かの山中不伐の類、木にたぐへて、其性尊し、僧懷素は、是に筆をはしらしめ、張横渠は、新葉を見て、修學の力とせしとなり、予其二ツをとらず、只此陰に遊びて、風雨に破れやすきを愛するのみ。

ばせを植てまづにくむ、萩の二葉哉

〔本草和名十八〕白襄荷音而一名覆菹赤也、楊玄操音姉反、和名女加。

〔倭名類聚抄十七〕襄荷 馬琬食經云、襄荷和名米加、赤色者爲佳矣、兼名苑云、一名覆菹伏且唐韻云

菹上音 大襄荷名也、

〔箋注倭名類聚抄九〕本草和名、白襄荷同訓、今俗呼女字賀中、本草白襄荷、陶注云、於人食之、赤者

爲勝、藥用、白者爲覆菹、同一種爾、說文云、襄荷一名菹菹、史記司馬相如傳作薄、且漢書作巴、且注引張

揖曰、菹且襄荷也、史記索隱云、巴且襄荷屬、楚辭大招、膾菹、只九歎注、襄荷菹、菹皆字異音近、然則

菹菹古蓋作復、且俗加艸頭耳、非假盜庚之菹字、履菹字也、中、廣雅、襄荷菹菹也、古今注、襄荷似菹

菹而白、菹菹色紫、花生根中、花未散時、可食、葉似薑、宜陰翳地種之、常依陰而生、王念孫曰、古今注以

紫爲菹菹、白爲襄荷、別錄注、以赤爲襄荷、白爲菹菹、廣韻則云、菹菹大襄荷、是又以大小分也、其實襄

菹爲菹菹、白爲襄荷、別錄注、以赤爲襄荷、白爲菹菹、廣韻則云、菹菹大襄荷、是又以大小分也、其實襄

襄荷  
名稱